

自分ができること

「現在、展示している作品は、今年開催されるオリンピックをモチーフにしたものです。毎年、その年を感じることでできる作品となるよう考えて創作しています。年末には、クリスマス仕様にして、見学される方に季節も感じてもらっています」と作品への思いを教えてくださいました米田さん。

クリンクルセンターのオープンをきっかけに、リサイクル意識の向上を図るため、何かできることはないかと考えたという米田さんは、より多くの人にリサイクルの可能性を知ってもらえればと華道を通して培った技術などを生かし、使わなくなった素材を利用した創作活動を始めたといえます。はじめは、空き缶などをそのま



▲クリンクルセンター内に展示されている米田さんが制作したリサイクルアート作品

ま使用していたという米田さんは、「創作活動を重ねるうちに、捨てる『ごみ』となってしまう『作品』も、見る人を楽しくする『作品』に生まれ変わらせることができる楽しみが大きくなりました。新たな創作意欲にもつながり、切ったり、貼ったり、色をつけたり、作品の幅も広がりました」とこれまでの作品を振り返ります。

作品が伝える

「家族はもちろん、作品を見た友人が空き缶などを届けてくれたりするなど、多くの人に支えられて、今まで続けることができました」と笑顔で教えてくれた米田さんは、今年迎える米寿を記念したこれまでの集大成ともいえる新たな作品の構想を練っているといいます。

「まだ、どのような作品になるか分かりませんが、私の作品が見た人の生活に彩りを与えるとともに、生活の中で、何かを捨てようとするときに『もったいない』、『再利用することができるとは』などと考えるきっかけになってもえたら、うれしいですね」と、今日も作品にリサイクルの心を吹き込みます。



KIRARI

よね た え み
米田 恵美さん (美園町)

皆さんは、クリンクルセンターの施設見学をしたことはありますか。見学順路に従って、クリンクルセンターの上階へと進むと色鮮やかな作品が目飛び込んできます。米田恵美さんが創作したリサイクルアート作品です。クリンクルセンターが稼働してまもなく始まった作品展示は、毎年、姿かたちを変えながら、今年で20年目を迎えます。今号では、展示を行う米田さんに、創作活動に対する思いを伺いました。

作品を通して伝える リサイクルの心



昭和8年、小樽生まれ。87歳。

27歳の時に家族とともに登別市に転入。20歳代から習い始めた華道に傾倒し、40歳代で華道教室を開講。池坊全国大会名誉顧問華道教授の肩書きを持ち、登別華道連盟の一員として、市役所1階に花を生けることもある。雅号は米田紘榮。現在の楽しみは、孫6人、ひ孫4人の成長を見守ること。